

---

# 白刃鬼

創離

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白刃鬼

### 【コード】

N3593U

### 【作者名】

創離

### 【あらすじ】

私は恨みを晴らす

私は、恨みを晴らす

私は、この恨みを、晴らす

この鮮血に染まる白刃で

ネットで話題になっている『白刃鬼』。美月はある  
日の夜、それと遭遇してしまった。そこまです。

(前書き)

比較的良く出来たかと

私は恨みを晴らす

私は、恨みを晴らす

私は、この恨みを、晴らす

この、鮮血に染まる白刃で

「ねえ、最近噂の『白刃鬼』<sup>はくじんぎ</sup>って知ってる？」

「え？ 何それ」

「美月知らないの？ 連続殺人犯」

「連続殺人犯？」

「そう、今月の頭に最初に現れたんだけど、殺人現場に残されるのは折れた白い日本刀の刃と、『我は白刃鬼、所世の悪を斬るものなり』っていう文字だけ。今ネットで話題の殺人鬼だよ」

「橘、その手の話題好きだよねえ」

「うん、なんせオタクなモノで」

「自分で言うか」

「もうネットじゃ宗教的に盛り上がってて、この後もオフ会に行くんだ」

「オフ会？」

「ネット仲間とリアルであってお喋りするんだよ」

「え？ でも、それかなり危ないんじゃない？」

「が、そこが萌える」

「いやいやいや」

「危ないと思うんなら一緒に来てよ、美月強いからいいでしょ?」

「強いとか関係ないし」

「会長のおごりで色々食べれるよ」

「そういう問題でもないでしょ」

「別にこないならそれでもいいよ」

「うーん」

(実際興味ない訳じゃないし、今日は木刀持参だから大丈夫かな)

「分かった、行くわよ」

「OK! それじゃ、掲示板にupしとかないと」

「個人名入れんなよ!」

「分かってるって」

ニヤけながら橘は携帯に夢中になっていた。

「へえ、女将は白刃鬼らしき人を見た事あるんだ」

「うん、この前TUTAYAで竹刀袋持った人がいて、日本刀の柄が見えたからもしかしたらって」

「で、次の日その近辺で死体が発見されたと」

「うん」

「でも実際、刀の柄なんて分かるの?」

「私たちは見慣れてるから」

「へえ」

オフ会は私を抜く三人で盛り上がっていた。

「何で?」

明らかにどっかのセフ。ロスを意識した白髪の男性はさっきから終始しゃべっているし、

「私たち、居合術習ってるから」

「居合? すごくすごい!」

この茶色い髪の女がうまく相槌を打って、私がいなくとも会話が

はかどっているのだ。まあ、元々私がいなかった訳だから当たり前なのだが。

「私たちって事は銀河ちゃんもやってるの？」

セフ。ロスが話しかけてくる。『銀河』と言うのは橘が決めた私のこの会での名前だ。ちなみに、『女将』は橘、茶髪が『会長』、セフ。ロスは『刀夜』。

「ええ、大変ですけど楽しいですよ」

「へえ、何か技見せてよ」

「素人さんが見て楽しい技は、やっぱり居合抜きでしょうか？」

「見たい見たい」

茶毛がはしゃいでいる。

「いずれ、機会があれば」

「え？ 今日駄目なの？」

「銀河、今日はもう疲れてるんですよ。居合って精神力使うから」

「ええー、そうなんですか」

「残念だなあ」

「ごめんなさい」

「いいよ、こっちこそごめんね」

「……」

そう言って、笑ったセフ。ロスは、かっこよかった……。

「私、ドリンクとってきますね」

（恥ずかしい、早くこの場を離れないと）

席を立った時、橘は私の居合の話をしているようだった。

（もう、白刃鬼のオフ会じゃない気がする）

まあ、そんな物なのかもしれない。

その後、皆で色々話していると夜になっていたので、解散する事になった。

「それじゃ、皆気を付けてね」

「それじゃね」

皆が思い思いに挨拶をして去っていく。

「銀河ちゃん、ここで待ってて」

「え？」

セフ。ロスが耳元で小さく呟いた。

そうして、私は橋と別れてこの場所に戻ってきた。

男の人に優しくされて舞い上がったのかもしれない。

「ごめんね、それじゃ行こうか」

戻ってきたセフ。ロスが手を握って町の奥に入っていく。

私はそれに連れられて、歩く。

そうすると、だんだん光の届かない裏道に入っていた。

(あれ?)

「あの、どこに行くんですか？」

「……」

「えーと、あの」

(まずい)

私は本能で悟った。

これは、ヤバイ。

片手では、木刀が取り出せない。最悪袋に入れたままで振ればい

いが、それでも私はこのままじゃ

「離して下さい!」

手を振りほどこうとするが、セフ。ロスの力が更に加わるだけだ

った。

「おい、本名は何て言うんだ」

「教える訳ないでしょう!」

違う、さっきまでとは全然態度が違っていた。

「ふん、まあ良い」

行き着いた場所は、袋小路だった。

「さて、こんな上玉はそうそういないからな」

「何を」

(何を言っているんだろ。頭がまともに働かない)

「私をどうするんですか」

「売るんだよ。俺その筋の売人でさ」

「売る？」

「あー、要約すると、あんたがおっさんに抱かれて俺が金を貰う。

OK？」

「……嫌よ。絶対嫌！」

「大丈夫、あんたにも取り分はある。それに痛くない様にこれから俺が教育してやるから」

「ちよ」

セフ。ロスの腕が私に向かって伸びてくる

「ふざけないで！」

私は震える体で木刀を振り、手をはじいた。

「……そう言えば、県内で一位の腕前だっけか」

そう言った瞬間、セフ。ロスの目つきが変わった。

「出来れば、傷モノにしたくないけど。まあ、少しくらい良いか」

(ボクサー?)

セフ。ロスはそう思える構えを取った。

「なるべく反抗しないでくれ」

(来る!)

セフ。ロスが拳を突き出してくる。

ドスツ

(あれ?)

拳は私に突き刺さっていた。

(あれ?)

いつもならかわせるどころか、反撃ができる位素人な拳。

(どうして?)

それが私の腹に突き刺さっていた。

「ごほっ」

「あれ？ 県内一位って言うからもつと手こずるかと思ったんだけど」

言いながら、セフ。ロスは私の腕を掴み壁に押し付ける。

「もうおしまい？」

「い……や」

セフ。ロスの腕が私の太ももにかかる。

そうして、それは目に映ってしまった。

「大丈夫、怖くない」

「何……それ」

「大丈夫」

セフ。ロスの手がスカートの中に入ってきた。

いや、それより。

「後ろ！ 後ろ！」

「その手には乗らないよ」

違う！

そう思った瞬間、それは振り下ろされた。

白い日本刀。

それが落ちた瞬間、辺りは赤く染まる。

いや、実際にはほとんど見えないからそれは想像でしかない。

しかし、この体を感じる湿りっ気は……

この匂いは……

何かが、私にもたれ掛かって来る

それは、考えるまでもなく、答えは一つしかない

「あ……あ」

声が出ない、足は震えを通り越してまったく反応がない。辛うじて動くのは指先くらいか。

「……こんばんわ」

目の前に立つそれは、焦りも殺意もなくこちらを見ている。

「だ……れ」

「噂の白刃鬼と言います」

声は震えながら、ほとんど無意識に発せられた。

「もう大丈夫です。ただ」

「た……だ？」

「これから大丈夫かどうかは、あなた次第です」

「ひっ」

道場で見慣れたそれは、切っ先がこちらに向く。

「そんなに怯えないでください」

季節外れのマフラーとほとんど何も見えない状況が手伝って表情は読めないが、きつと笑っているだろう。

「大丈夫。ほら、これで武器はなくなります」

白刃鬼は地面に日本刀を叩きつける。

ぱきんっ

「これで怖くない」

白刃鬼はポケットから何かを取り出し地面に投げ捨てる。

「『我は白刃鬼、所世の悪を斬るものなり』……よく覚えておいてください。道をたがえれば、僕はあなたを斬らなくてはならなくなる」

落ち着いたその声は、こちらに有無を言わせない迫力に満ちていた。

「僕があなたを助けた事が、無駄にならない事を祈ります」  
そう言って、白刃鬼は夜に消えて行った。

(後書き)

続きは今度書きます

たぶん

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3593u/>

---

白刃鬼

2011年6月25日23時12分発行